

記念誌 「相中相高八十年」 ” 思い出の記 ” より

” あゝ紅の血は燃ゆる ”

高普第 1 回卒 渡部 行^(※1)

ゝ 花もつぼみの若ざくら 五尺のいのちひつさげて
 国の大事に殉ずるは われら学徒の面目ぞ あゝ紅の血は燃ゆる

昭和二十年三月、春休み中のある日の夕方。水郡線の磐城石川駅に着いて、仮宿舎の石川小学校に向かう相馬中学二年生、約二百名の隊列のなかから” あゝ紅の血は燃ゆる ” (学徒出陣の歌) の合唱が流れた。誰が音頭をとったわけでもなく、ごく自然に……。小さい胸のなかに「精一杯、国の大難に役立つ」といった健気な気持があった。それにしてもまだ十四歳。幼い学徒出陣だった。

第一夜。石川小学校の校庭が、三日月で薄明るくなった頃「夜襲だ」という叫びで、みんなが廊下にあった木刀などを手にして校庭に集った。石川中学の不良生徒十人ほどが喧嘩を売りにきたのだった。両校の” 番長 ” 同志が、やくざもどきに、腰をおとし、両手を広げて仁義を切った。「早速お控え下すって有難うござんす。手前、生国と発しますは福島でござんす。福島、福島といってもいささか広うござんす。東は金波銀波の太平洋、西は……」といった台詞だった。石中の番長は結局、ゴロを巻く(喧嘩)ことをやめた。口上だけで、戦わずして降参したのである。それ以来の約二ヶ月間、幸か不幸か、またあまり名誉ではないが、相中は県下から動員された十校ほどの中学のなかで最強校として君臨した。

…… 中略 ……

本堂は広がったが、百人が泊まるには狭かった。相馬から持参させられた敷蒲団を敷くには本堂だけでは足りない。最初の夜、生徒達は付きそいの先生にお話しをねだった。講談の上手な橋川琢二先生が、怪談を一席演じた。その翌朝が大変、あたり一面が糞尿だらけとなった。お寺、お墓、舞台装置は揃っていたし、あたりは空襲に備えて灯火管制中で真暗。あまりの恐さに便所まで行かず、渡り廊下にてやっしまい、それを知らずに後から便所にいった生徒達がそれをふんづけて、汚物をまき散らしたからだ。背伸びはしていても所詮は子供、誰も責めることはできないだろう。

…… 中略 ……

少年達にとって肉体労働はきつかった。夕方には足が棒のようになった。それに食物がなかった。育ち盛りのとき食糧がないほどつらいことがあるか。主食のご飯は朝がどんぶりにちょっと山盛一杯、これで朝と昼の二食分。それも米よりは大豆の方が多かった。味噌汁は得体の知れない山菜、おかずは時折、にしんの塩付けなどだった。これではたまらない。そこでどんぶりに半分ほどの夜食のご飯を食い残して朝食に廻し、昼の弁当に多く持っていくようにした。夜はもう寝るだけだったし、腹が減っていても、日中の肉体労働の疲れで、綿のように眠った。

日常生活は暴力が幅をきかせた。正義も道徳も小さくなっていた。だから不良グループは給食の手伝いに来ていた国防婦人会のおばさん達の目をごまかして、ご飯を二度もらったり、そのほかの配給物資も腕力の強い者が優先した。今考えてみると” 猿山のボス猿 ” のようで、民主主義などなかった。配給といえば、皮靴はもちろんズックもゴム靴もなかった。下駄はあったがこれで土工をするわけにはいかない。履物は農家の人達が軍の命令で供出してくれる” わらじ ” だった。素足にわらじで砂利道を歩くのは痛いものだが、最後には慣れて上手に履いた。このわらじも、作る人によって、いいのと粗悪なのとあったが、いいのはやはり暴力生徒にせしめられた。

突貫工事だけに、土曜も日曜もなく、文字どおり” 月火水木金 ”。雨の日だけが休みだったが、それでも昼前に天気が回復すると往復十二キロの現場に歩いて行った。

…… 後略 ……

(※1) 昭和 24 (1949) 年卒 飯豊出身